

平成 20 年度研究チーム活動中間報告（第 1 回目）

「大学教育における学習への動機づけ研究－甲南大学の教育効果を高めるための 1 つの試み－」

No. 106 研究幹事：藤原三枝子（国際言語文化センター）

「動機づけ」は、教育分野においても重要なテーマとして研究されてきた。どのような分野であれ、学習がおこるときには、その理由、意欲の度合い、効果や継続について動機づけが深く関与しているからである。大学教育において、学生たちが専門教育や外国語教育に「やる気」を感じ、それを持続させ、一定の成果を達成するために、高等教育独自の動機づけ研究が必要である。内容関与的な動機づけを高め、知識を主体的に構成していくことに喜びや楽しさを感じる「自律的な学習者」に学生を育てていくことが大学教育の目的の一つであろう。

本研究チームでは、教育学的視点、社会学的視点、および言語教育研究の視点から、実際の協力によって、大学生の学習動機づけの本質に迫るべく、2008 年度は、以下に述べる個人研究を進めるとともに、8 回の研究会を開催し討論を行った。この共同研究会では、現在、教育学分野において注目を浴びている自己決定理論(Self Determination Theory)に関する基礎的文献の購読と、それを理解するために、統計的な分析手法の勉強を行った。

2008 年度の個人研究は以下のテーマを中心とした：

1) 「学生の学びの実態把握と教育成果に焦点を合わせた組織的學生調査ネットワークの構築」のための基礎的研究と、他大学との連携による調査実施のための準備。実質的なデータをベースに教育改善を推進する仕組みは、IR(institutional research 機関研究)と呼ばれ、教育改革を推し進めるために、世界各国で実践的な研究がなされている。われわれの動機づけ研究が、現在、甲南大学を含む 4 大学が連携して実施を計画している教育改善プロジェクトを、「研究的側面」からサポートすることが期待される。（平松 闊）

2) カナダあるいは日本に留学して、その目標言語を習得する学生たちの動機と意味づけに関する量的および質的調査。

2008 年度の調査結果は、一般に「民族言語的バイタリティーの強い外国語の方が、実用的価値が高い傾向にあり学習意欲がおこりやすいが、逆に実用的価値が低い言語をわざわざ学習しようという人は、統合的動機が強い可能性が高く、その言語への純粋な興味を反映していると言える。」との概念も反映している。この結果をうけて、2009 年度は、世界共通語としての英語の学習と、一つの地域言語である日本語の学習のための留学志向や動機についての研究を深める。（原田 登美）

3) 教師の主観的な言語観、言語学習観、言語教育観が学習者の学習意欲形成に与える影響に関する調査。

2008年度は、8つの大学（桜美林大学、関西大学、近畿大学、九州共立大学、上智大学、同志社大学、松山大学、立命館大学）で、ドイツ語授業を担当する10名の教員への聴き取り調査を行い、共通教科書がそれを使用する教師側に与える影響について探った。2009年度は、「学習記録」と「授業記録」を基に、教科書のコンセプトが学習動機づけに影響を及ぼす要因を、学習者の立場と教師の立場の双方の視点から調査・分析する。（森田昌美）

4) 外国語としてのドイツ語学習の開始動機調査と、教科書のコンセプトが学習者の動機づけ形成に及ぼす影響調査。

ドイツ語は大学において初めて学習される外国語であり、すでに公教育において6年間学んだ英語とは学習の開始動機が異なっていることが多い。本研究では、甲南大学を含む近畿圏にある国公立大学12大学でドイツ語を学習している初年次生を対象に、質問紙によって学習開始動機を探った。2009年度は、1年間の学習過程における学習意欲の変化および動機づけ形成プロセスを量的・質的に調査・分析する。（藤原三枝子）

2009年度は、実際にそれぞれの立場から行った調査結果を持ち寄った上で、チーム全体として総合的に調査結果を分析して、学習者の動機づけの実態を明らかにするとともに、学習意欲を引き出し、高め、維持するための教育の可能生を探っていきたい。